



大田区探歩 〈6〉

まごめ 馬込

今回は、日本の大動脈である東海道新幹線や国道1号線（第二京浜）環七通りが貫く、誰もが一度は（知らない内に？）通り過ぎた事のある町「馬込」を紹介します。

馬込は、大田区北部にあり、地名の由来は諸説ありますが、古くから山手（やまのて）台地上の馬の放牧地として使われたという説があります。昔から馬込九十九谷と呼ばれ、丘と谷が複雑に入り組み、実際に歩いてみると、坂道が多く起伏に富んだ土地である事が体感できます。

それでは、少し散策してみましょう。都営地下鉄浅草線「馬込駅」を出て、国道1号線（第二京浜）を横浜方面に向かうと、すぐに環七通りと交



松原橋（第二京浜×環七通り）
差する日本最初の立体道路橋「松原橋」が見えて



馬込坂



西馬込駅

きます。

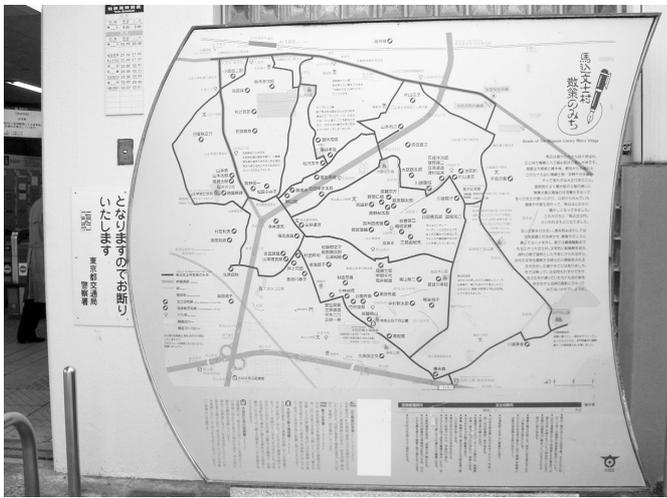
松原橋を越え、東海道新幹線と交差する鉄橋の下を進むと、長く緩やかな下り坂が続きます。この坂は「馬込坂」と呼ばれ、第二京浜国道が建設され、昭和24年頃より五反田から多摩川際までのバスが通るようになり、馬込坂下や馬込端のバス停ができると自然に馬込坂と呼ばれるようになったそうです。

長い下り坂が一段落すると、「西馬込駅」にたどり着きます。西馬込駅は東京23区では珍しい始発駅（末端駅）であるため、通勤時間帯でも座席に座ることが容易でストレスなく出勤する事ができます。西馬込駅より少し進むと、脇道に歩道橋があり、これを渡る途中には眼下に「東京都交通局馬込車両基地」が広がり、鉄道ファンであればここまで足を伸ばしたいところです。車両基地よりさらに進めば「池上本門寺」も近いが、今回の目的とは異なるので、今回はここで引き返しましょう。

西馬込駅に戻り駅前で一息つくと、「馬込文士



東京都交通局馬込車両基地



西馬込駅（馬込文士村看板）

村散策のみち」という案内板が目に入ってきます。「馬込文士村」とは、大正末から昭和初期を中心とした時期に、現在の馬込、山王、中央とその周辺の地域に多くの作家や芸術家たちが居住したことから、後に馬込文士村と呼ばれるようになったそうです。

関東大震災の後に、震災前から馬込で暮らすようになった「人生劇場」の尾崎士郎が、「馬込はいい所だぞ」と言っただけで仲間を誘った事が、より多くの人に移り住むようになったきっかけとされています。

尾崎士郎のほか、日本人初のノーベル文学賞を受賞した川端康成、「青い山脈」の石坂洋次郎、「樅の木は残った」の山本周五郎、「赤毛のアン」の翻訳者の村岡花子、日本画家の川端龍子、詩人の北原白秋、室生犀星、萩原朔太郎、小説家の宇野千代、書家の熊谷恒子、ほかにも紙面の都合で紹介しきれない多くの文士たちが、かつての馬込文士村の住人で、互いの家を行き来したり、家族ぐるみで深く交流していた人が多かったようです。



八幡神社

現在、大田区ではこの馬込文士村の地域を巡る散策コースが設定されていて、各所に解説板や記念館なども点在していて、多くの文学愛好者が散策を楽しんでいます。

話を戻しましょう。西馬込駅から南馬込地区の閑静な住宅街を進むと、「桜並木通り」があり、毎年4月の第一日曜日に開催される「馬込文士村大桜祭」では多くの花見客で賑わうなど、地元の人にはお馴染みの花見スポットです。

更に進みと、勾配の急な坂に出てきます。この坂は「臼田坂」と呼ばれ、かつては川端康成が住んでいた事もあり、原稿執筆のための電燈が深夜まで灯っていて、臼田坂を行き来する近所の人から重宝がられたようです。

この急な坂を息を切らしながら上り、少し進んで脇道に入ると、「大田区立郷土博物館」があります。入館は無料で、大森貝塚などの考古関係資



大田区立郷土博物館

料（土器、石器、骨角器、埴輪など）大田区沿岸の海苔養殖関係資料、馬込文士村関係資料（文士たちの作品、自筆原稿、遺品など）などが常設展示されています。馬込文士村のガイドブックや散策マップもここで入手できます。

最後に、かつての馬込村全域の総鎮守「(馬込)八幡神社」を参拝して、最後までお読みいただいた皆様の今後ますますのご発展とご健勝を祈念し、帰路に着く事にしましょう。

駆け足で紹介しましたが、新幹線や車で通り過ぎるだけでなく、ぜひ一度は馬込を訪れてみて、馬込文士村の散策マップを片手に、当時の文士たちの生活に思いを馳せながら、散策してみたいかがでしょうか。

筆者：山一電機株式会社 関 淳一